

八木健に学ぶ滑稽俳句 3

高橋 素子

この二年近く毎週、「八木健の五七五の笑い」が電波に乗せて全国に配信されている。現在は、日曜日午後五時半から南海放送のホームページで、聞くことが出来る。「萬翠荘アワー」のタイトル。

この放送が始まった頃であったが、師匠が笑いに乗せて俳句と川柳の違いを具体的に説明されていた。前回に引き続き「俳句」と「川柳」の違いを、今少し具体的に解明してみたい。

瀧の上に水現れて落ちにけり 後藤夜半

ただの写生ではなく、人間個人の小ささに比べての大自然の悠久感、そのひたすらの繰り返しに感動して詠んだ夜半の瀧の名句であると、師匠・八木健は説明する。

なんぼでもあるぞと滝の水は落ち 前田伍健

これに対して「なんぼでもあるぞ」という俗語を用い、滝を擬人化した伍健の川柳を挙げている。伍健は「野球拳」の創始者としての顔も持ち、多芸に優れ、愛媛川柳界の隆盛を築いたカリスマ作家である。

滝の水堕ちると決めてより一途 八木健

緩やかに漂って堕ちるのを迷っている様にみえる水も、滝の淵に来た時、躊躇することなく滝めがけて身投げするのである。その一途は誰も止めることは出来ない。滝を擬人化すると、こういう説明になると、師匠は語る。迫力ある面白い滝の水の擬人化の説明。流石、滑稽俳句協会会長の名句と解説である。

同じ様な俳句と川柳の具体例を探してみる。

春の海終日のたりのたりかな 与謝蕪村

怠けぐせ治らず春の海のたり 八木健

この句は所謂蕪村の句の「本歌取り」である。蕪村は春の海を写生して

いるが、師・八木健は春の海を徹底して擬人化している。以前「ご謙遜されてご自分の性格も怠けぐせだと…」と、勝手に解釈をしたら、「私の性格？とんでもない。これでも私は、結構勤勉型なのですよ」と、笑われた。

この句は「のたり」とした「怠けぐせ」が治らない自然の悠久を賛美した滑稽句なのである。

師匠に、「春の海」を使った模範川柳をお願いしてみる。

閑だから詠めた蕪村の春の海 八木健

終日飽かず海を眺めて一句をものにした蕪村は、貧乏・暇ばかりあった。その暇が幸いして、春の海が終日のたりしていることを、発見したのである。そこに師匠は気が付いたらしく「私には、こういう句は出来ない。多忙だから…」と、笑われた。

俳句と川柳の違いが分かって来たので、俳句の本質に立ち戻ってみたい。

芭蕉は「物の見えたる光いまだ心に消えざるうちにいひとむべし」（服部土芳「赤冊子」）と、俳句の本質を表現して、蟬のはかない命をインパクトな感動で詠んでいる。

やがて死ぬけしきは見えず蟬の声 松尾芭蕉

師・八木健も「俳句とは何か」という質問に答えて「言葉のスナップ写真である」と説く。更に「世界で一番短い詩」であり、詩とは「ああ」という感動と「ふふふ」という可笑しさであるとも説明している。つまり、両者は出会った瞬間の「あっ」という感動が消えないうちに言語化して、俳句に詠む様に教えてくれているのである。

師・八木健の蟬の滑稽句に実例を探ってみよう。

自らを死体遺棄して油蟬 八木健

先ほどまで、鳴いていた蟬が、誰かが放置した物体の様に、仰向けになって死んでいる。落蟬となった自然のこの摂理に、師匠が心と体で感じた「ああ」というインパクトな感動を写生に徹して、哀感の透ける見事な滑稽句に仕上げています。

落ちてすぐ蟻が検死の油蟬 八木健

落蟬に感傷的になっている詠み手の気持を裏切る様に、蟻が喜々として蟬の死骸に取り付いている。その蟻の抜け目のなさ、懸命さ、慌てぶりに感じた「可笑しさ」を「検死」という言葉を使って、擬人化の滑稽句となった。

蟬殻をぬぎつつあればセミヌード 八木健

今正に、蟬は脱皮の真っ最中。上半身の皮を脱ぎ、この世に生れ出る苦しみの瞬間である。でも、それは、蟬のヌードであり、擬人化すれば半裸すなわちセミヌードである。地口の面白さに、色気さえ感じられる。自然の理の厳しさ、哀しさも透けて見える師匠の見事な機智的言語遊戯の滑稽句である。

頭を低くして蟬時雨くぐりけり 八木健

「俳句は基本的には写生だが、滑稽句のコツはその観察を非科学的にする事である」と、師匠に聞かされている。「凄まじい蟬時雨の森を抜ける時のコツは、頭を両手で抱えて低くして、息をせず走り抜けることである」と、師匠は説明する。常識を捨てた非科学的な面白い句と説明であるが、繰り返し読んでみると、確かにこの方が常識的に感じられるから不思議である。